

GHQ占領期における在日朝鮮人雑誌の書誌的研究

小林 聡明

はじめに

今、あらためてプランゲ文庫が注目されている。¹ワシントン DC 郊外にあるメリーランド大学ホーンベイク図書館にあるプランゲ文庫には、GHQ 占領下の日本で発行された新聞 18,047 タイトル、図書とパンフレット約 71,000 タイトル、雑誌 13,799 タイトル、報道写真約 10,000 枚が収められている。これらの史料群は、1945 年から 1949 年までの間に GHQ 傘下の CCD (民間検閲局) に対して、検閲をうけるために提出された印刷物である。そこには学校新聞から同人誌、全国紙にいたるまで大小さまざまなメディアが含まれている。プランゲ文庫で見られる多様なメディアの状況は、敗戦後の日本で人びとが、いかにメディアの立ち上げに情熱を傾け、メディア接触に大きな欲望を抱いていたのかを浮き彫りにしている。

ここで重要なことは、こうした情熱や欲望を抱いていたのは、何も「日本人」だけではなかったことである。在日朝鮮人や華僑らも、さまざまなメディアを成立させようと奔走していた。ところが、GHQ 占領期のメディアに対する関心は、高まっているもの、朝鮮人や華僑によるメディアについては、依然として十分な考察対象となっていない。2009 年度から、神奈川大学人文学研究所で始まった「プランゲ文庫と東アジア研究会」は、在日朝鮮人や華僑によって立ち上げられたメディアを分析することで、戦後の日本社会を多角的な視点で描き直そうとするプロジェクトである。それは、日本社会が「日本人」のみで構成されているかのような「神話的」イメージを解体し、日本社会が本来的に抱え込む多様性や重層性を歴史叙述を通じて取り戻す試みである。²

1. 手がかりとしてのプランゲ文庫

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて生じた帝国日本の膨張は、帝国内外における激しい人の移動を引き起こした。なかでも朝鮮人は、「自主的」に、あるいは強制的に、日本や満洲、中国などへと生活の場を移していった。彼ら・彼女らは世界的にも類を見ない離散の民となっていた。³

1945 年 8 月、帝国日本がアジア太平洋戦争に敗れたとき、日本で暮らす朝鮮人は 200 万人以上にのぼっていた。日本敗戦／朝鮮解放後、彼ら・彼女らは、ただちに故郷への帰還を目指した。こうしたなか、失業対策や民族的団結の強化、生命財産の保護など、在日朝鮮人による政治経済活動を支援する団体が、数多く立ち上げられた。9 月に入ると、在日朝鮮人の中で民族的大同団結による民主主義的で中央集権的な全国組織の設立が試みられた。

1945 年 10 月 15 日、在日朝鮮人の集約的な団体として在日本朝鮮人連盟 (朝連) が発足し、その直前の 10 日に『朝鮮民衆新聞』が東京で創刊された。これが解放後、在日朝鮮人による初めての新聞発行となった。翌月には大阪で『大衆新聞』が創刊され、いずれの新聞も朝連の機関紙とは銘打たれていなかったが、事実上の機関紙の役割を果たしていた。印刷用紙やハングル活字の字母の不足、さらに新聞

発行のノウハウを持った人物が極めて少ないなど、厳しい環境のなかで、在日朝鮮人による新聞発行はスタートした。以後、1949年までに、少なくとも124タイトルの新聞が発行された。終戦から間もない1945年秋の時点で、在日朝鮮人による新聞発行は、すでに活発な状況を呈していた。

新聞に比べ、刊行された雑誌のタイトルは少なく、また、終戦直後の在日朝鮮人による雑誌の刊行状況について記した資料も、きわめて乏しい。管見のかぎり、GHQ文書については、ほぼ皆無であり、在日朝鮮人側の資料でわずかながら伺い知れる程度である。

1949年に刊行された『文化年鑑』（朝連文化部）は、在日朝鮮人による雑誌の刊行状況について、手がかりを与えてくれる、ほぼ唯一の史料となっている。そこには、次のような記述が見られる。

8・15直後、謄写版で出版した『朝鮮民衆新聞』と『高麗文芸』『人民文化』などは、各々、自己の財力が許す範囲内で、字母の彫刻、活字の鑄造に努力してきた。（中略）定期刊行物としては、解放直後、総合文化誌である『人民文化』（同人制、李珍珪、林鳳俊、吳守麟、許南麒）、詩の専門誌として『朝鮮詩』（吉元成）、『高麗文芸』（許宗軫）などが前後して発行された。だが、経営難と印刷難で、『人民文化』は7号、『朝鮮詩』は2号、『高麗文芸』は3号をもって、廃刊された。その後、『人民文化』は、事実上、廃刊されたが、その全同人が、当時の『民衆新聞』に入社し、『人民文化』の発行趣旨を、朝鮮民衆新聞紙上で、ある程度まで載せることができた。

『文化年鑑』によれば、解放直後に創刊された雑誌には『人民文化』や『朝鮮詩』、『高麗文芸』などがあったことがわかる。在日朝鮮人によって、解放後、最初に創刊された雑誌が、1945年12月1日に創刊された『人民文化』であったとされる³。

『人民文化』のほか、『朝鮮詩』も解放直後に創刊された雑誌の一つであった。同誌は、1946年1月15日に東京・渋谷にある祖国文学社によって創刊され、発行・編集人は吉元成となっていた⁴。この後、吉元成は、極東出版社を設立し、活発な出版活動を展開した。

『人民文化』や『朝鮮詩』は、プランゲ文庫や国立国会図書館にも所蔵されておらず、さらにGHQ文書でも一切の言及が見られない。『人民文化』は、第7号（1946年5月）で、『朝鮮詩』は、創刊号（1946年1月）で廃刊した。そのため、GHQの監視網にかからず、文書史料に含まれていなかったと考えられる。

『文化年鑑』から『在日本朝鮮人連盟—1945-1949』（吳圭祥、岩波書店、2009年）の研究にいたるまで、1945年12月から翌年1月頃に創刊された『人民文化』や『朝鮮詩』が、在日朝鮮人による最初の雑誌と位置づけられている。だが、実際には、こうした雑誌以外にも、在日本朝鮮居留民団といった朝連と対立する団体や、民族運動を展開する組織とは一線を画しながら、個人によって創刊された雑誌も存在していた。『文化年鑑』にしろ、吳圭祥の研究にしろ、朝連（あるいはその関係者）が発行した雑誌を中心に紹介しているため、占領期に在日朝鮮人が発行した雑誌の世界のうち、限られた側面しか明らかにされていない。

プランゲ文庫には解放直後から1949年頃までに在日朝鮮人が発行にかかわった雑誌が多数所蔵されている。だが、そこには、どのようなタイトルの雑誌が所蔵されており、それらの雑誌が、いかなるものであったのかは、ほとんど解明されていない。筆者の調査によれば、1945年9月から1949年10月末までに少なくとも38タイトルの雑誌（うち、プランゲ文庫に32タイトルが所蔵）が、在日朝鮮人によって発行されていたことが確認される。それは、これまで知られてきたタイトルの2倍の量となっており、いかに多数の「未発見」雑誌が、プランゲ文庫に存在しているのかを示している⁵。

これまで『民主朝鮮』などの著名な雑誌などは、研究の俎上にあげられてきた⁶。一方で、発行が短期

間であったり、民族運動とは距離をおいていた雑誌などについては、「雑多な」ものとして扱われ、ほとんど言及されてこなかった。だが、これら「雑多な」雑誌への検討を看過させたまま、占領期における在日朝鮮人雑誌の世界を描き出すことが、もはや困難であることは明白である。「雑多な」雑誌のなかにこそ、この時代を生きた在日朝鮮人の多様な日常的実践が織り込まれているのである。「雑多な」雑誌を含む包括的な在日朝鮮人雑誌の検討・分析は、彼ら・彼女らの豊かな生活世界を叙述するための、一つの重要な作業となる。

本稿は、主としてプランゲ文庫に所蔵される在日朝鮮人が関与した雑誌について書誌的情報の提供を目的とする。それは占領期における在日朝鮮人の生活世界を描き出すための、必要不可欠な基礎作業である。この作業の重要性は、占領期に華僑が発行した雑誌についても言える。在日朝鮮人や華僑に目を向けたとき、プランゲ文庫は、いまなお未開拓な資料群となっている。

2. プランゲ文庫所蔵の在日朝鮮人雑誌

朝連は、旧親日派や共産主義者などを網羅した左右合作的な組織として発足することを目指した。だが、左派の主導権が確立されるにつれて、右派民族主義的な傾向を持つ徐鐘実、洪賢基、李海龍、全相浩、許雲龍らは不満を募らせ、朝連から距離を置くようになった。

1945年11月16日、彼らは、朝連から排除された旧親日派や反共主義者らを引き入れ、総勢30人からなる在日本朝鮮建国青年同盟（建青）を結成した。さらに、翌年1月20日には、秋田刑務所から釈放された朴烈など無政府主義者や旧親日派らによって、朝連に対抗する組織として新朝鮮建設同盟（建同）が発足した。建同は、右派陣営としての立場を鮮明にし、朝連と鋭く対立した。だが、建青や建同は、朝連に対抗するには大衆的な基盤が脆弱であった。

1946年10月3日、右派陣営の結集体として、東京の日比谷公会堂にて、在日本朝鮮居留民団（民団）の創団大会が開催され、2000人の在日朝鮮人と20あまりの団体が参加した。団長には、建同委員長であった朴烈が選出され、副団長には建同副委員長である李康勲が就任した。一方、建青は民団結成後も、朝鮮統一民主同志会を結成し、活動を継続した。

左派の朝連、そして傘下団体の在日本朝鮮民主青年同盟（民青）と、右派の民団、建青は、激しく対立した。在日朝鮮人社会には、左か右かという二項対立的な枠組みが設定され、深刻な亀裂が生じていった。

以上の時代背景をふまえ、GHQ占領期に在日朝鮮人が発行にかかわった雑誌について、まず機関誌から見ていきたい。

(1) 機関誌

①『青年』（朝鮮語）

1946年1月（推定）、建青総本部文化部（青年雑誌社）により東京で創刊。1万部。執筆陣には主として、建青委員長の洪賢基や民団団長の朴烈ら民団・建青関係者が名を連ねていた。また、早稲田大学教授の瀧口宏や後に朝鮮史研究者となる朴慶植らの名前も見られた。建青の方針を直接的な言葉で伝えるよりも、むしろ朝鮮語による啓蒙と教養の獲得に主眼がおかれた雑誌であった。

②『新朝鮮』（朝鮮語）

1946年4月、建同中央総本部文化部により東京で創刊。「新朝鮮創刊辞」は、「36年間、われわれは侵略帝国主義日本の圧制下で、すべて搾取され、人間として、すべての自由がない奴隷生活を続けてきた」が、日本の降伏により、「再び独立の曙光を満身に感じ」、「我が民族の生活に希望を感じた」として、植

民地支配から解放されたことの喜びを率直に表現した。こうした状況のもとで、『新朝鮮』は、「我々が愛する同胞諸兄の良い指針」になることを掲げ、発行された。⁹

目次のページには「新朝鮮建設同盟原則綱領」が掲載され、建同の機関誌であることが前面に打ち出されていた。また、執筆陣には民団団長の朴烈のほか、李承晩や金九、安在鴻の論考も見られた。さらに、「本国消息・動静」とする記事のほか、8月15日の解放記念日を祝う、マッカーサーや駐日朝鮮米軍政庁代表、中国留日華僑代表からの祝辞なども掲載された。『新朝鮮』は、建同の方針だけでなく、米軍占領下の南朝鮮情勢を伝えるとともに、建同そのものが、いかに米国や中国から「承認」された組織であるのかを宣伝する役割も担っていた。

③『朝聯文化』（朝鮮語）

1946年4月、朝連中央総本部文化部にて創刊。5000部。同誌の発行は、1945年秋の朝連準備委員会の頃に構想されたが、原稿執筆者の不足、印刷や技術的な問題により創刊が遅れたとされる。同誌は2号（1946年10月）をもって廃刊となった。¹⁰『朝聯文化』の発行は、きわめて短期間で終わったとはいえ、創刊号には、朝連関係者の発行にかける強い思いが伝わってくる。

編集人の李相堯は、「民族解放の道は一朝聯文化を発刊して」のなかで、「我々の唯一の武器はペンである」とし、祖国建設は、文化建設であると訴える。そして、「民主主義朝鮮建国」のためには、啓蒙こそが重要であると力説する。『朝聯文化』の発行は、明らかに一つの政治闘争の手段として位置づけられていた。

④『時潮』（朝鮮語）

1947年4月（推定）、建青港支部（朝鮮世紀社）により創刊。部数は50部とされ、きわめて限られた範囲でのみ流通した同人誌的な出版物であったと考えられる。「朝鮮民族性論」（金基本）や「朝鮮の当面問題」（南昇祐）などの政治的な論考のほか、「朝鮮の料理について」や詩なども掲載されるなど、内容は多彩であった。

⑤『民主青年』（朝鮮語／日本語）

1947年4月（推定）、民青東京本部文化部により創刊。「朝鮮少年運動の史的考察と在日朝鮮少年運動」（李現哲）など、今後の運動方針に関する論考のほか、「米ソ共同委員会に関して」など祖国情勢と今後の見通しを伝える記事も掲載されていた。

⑥その他の機関誌

プランゲ文庫に所蔵されていない機関誌として、『平和』（朝連兵庫県本部文化部）、『青年会議』（民青総本部文化部）、『建国』（朝鮮青年同盟中央総本部）、『朝鮮青年』（朝鮮青年同盟大阪本部）がある。これらは、『在日朝鮮人関係資料集成戦後編 第9巻』（不二出版、2001年）に収められている。

(2) 経済誌

『経済文化』（日本語）

1946年3月、大阪朝鮮人商工会により創刊。創刊号の表紙には太極旗が印刷されており、在日朝鮮人によって刊行された雑誌であることが一見してわかる。占領下に日本で在日朝鮮人が発行していた経済紙は、11タイトルが確認される一方で、経済に関する雑誌は、『経済文化』のみである。¹¹経済誌の少なさは、もともと在日朝鮮人による経済関連の雑誌がほとんど発行されていなかったか、あるいはGHQ/SCAPによる検閲上の関心が、そもそも低かったのか、いずれの原因によるものかは、現時点では不明

である。

(3) 文芸誌

①『高麗文芸』(朝鮮語)

東京にある高麗文芸社にて発行。創刊は1945年12月と推定される¹²。発行人は、朝鮮国際新聞社を営する許宗軫であった¹³。呉圭祥によれば、同誌は5号で廃刊になったとされるが、プランゲ文庫には1946年7月に発行された第9・10号が所蔵されている¹⁴。

②『朝鮮文芸』(日本語)

1947年10月、東京にある朝鮮文芸社で創刊。編集兼発行人を朴三文とし、発行部数は2000部。創刊号の「編集後記」では、一般読者への投稿が呼びかけられており、題材が朝鮮に関するものなら、書き手は朝鮮人に限らないことが謳われていた。

③『朝鮮文芸』(朝鮮語)

1948年3月、日本語版と同じく朝鮮文芸社により、編集兼発行人を朴三文で創刊。1500部。在日朝鮮人一般というよりも、むしろ在日朝鮮人文学者を読者対象に想定して発行されていたと考えられる。

④『봉화』(烽火) (朝鮮語)

1949年6月、在日本朝鮮文学会により、東京で創刊。編集兼発行人は、戦前の芥川賞候補となり、解放後に朝連の活動にかかわった李殷直である。印刷は朝連の事実上の機関紙となっていた解放新聞社で行われていた。朝連ときわめて近い路線で発行されていた。発行部数は1万部から2万部。同誌は、解放後に出された初めてハングルの雑誌とされ、学校の副教材や講習会、読書会で活用されるように、なるべく平易な文章で構成された¹⁵。

⑤『国際文学』(日本語)

1946年8月、東京にある極東出版社(旧KOREA出版社)にて創刊。5000部¹⁶。発行人兼編集人である吉元成は、極東出版社を営し、手広く出版事業を行っていた人物である。彼は、「巻頭言」を通じて、次のように発行の目的や方向性を読者に伝えていた¹⁷。純文学路線を追求する雑誌として創刊された。

私達は此の雑誌の編集が出来あがつてから参加したために作品を創刊号に紹介することが出来ないことは如何にも残念と思ふが二号からは朝鮮、日本、中国のみでなく、世界文学青年と共に手を握つて来るべき新しい時代のために身命を捧げたいと思ふ。志を共にする若き文学青年よ来て新しい美しい文学を創造しようではないか。

⑥『白民』

1947年頃、東京にある白民社により創刊。1万部。日本の植民地支配下で朝鮮人内部に形づくられた道徳や論理、イデオロギー、知性は、朝鮮人による文学活動の発展を妨げている。同誌は、こうした植民地主義の残滓を否定することから、朝鮮人による文学は出発すると位置づけ、若い世代の在日朝鮮人による文学活動を涵養させる目的をもって発行された¹⁸。

(4) 宗教誌

『十字架』(朝鮮語)

1946年6月(推定),朝鮮基督教東京教会青年会により創刊。編集人を金景潤,発行人を同青年会文化部の呉景世とし,在日朝鮮人への布教・啓蒙を目的にした雑誌と考えられる。プランゲ文庫には,同誌以外に,在日朝鮮人が発行していた宗教誌は見当たらない。

(5) スポーツ誌

『拳闘スポーツ』(日本語)

1947年2月,東京にある国際文化出版社により創刊。あくまでスポーツ雑誌として位置づけられ,掲載原稿からは在日朝鮮人が発行に携わっていることはほとんど感じられない。同誌には,吉元成の極東出版社や朴魯禎による『国際新聞』の広告が掲載されており,唯一それらが,在日朝鮮人との関係を想起させるにすぎない。同誌は,プランゲ文庫に所蔵される,在日朝鮮人による唯一のスポーツ誌である。

(6) 児童誌

①『별나라』(星の国)(朝鮮語)

1947年4月,国際児童文化協会により,川崎にて創刊。編集兼発行人を金星圭,印刷人を黄仁桂として,700部を発行。平易な朝鮮語が用いられ,在日朝鮮人の子ども達に対する啓蒙を発行の目的としていた。

②『어린이통신』(子ども通信)(朝鮮語)

1946年7月,東京の朝連総本部により創刊。同誌の発行は,1946年6月の朝連第二回全国文化部長会議で決定され,2万部が印刷された。¹⁹創刊号は,発行の目的について,次のように主張する。²⁰

我々は,我々の通信を持たなければならない。なぜ,我々の通信を持たなければならないのか。第一に,我々是我が国の友人たちのニュースを十分に知りたいからである。第二に,我々是我が国を解放してくれたソ連,米国,中華民国,英国などの連合国の友人が何を,どのように学んでいるのかを知りたいからである。それだけではない。我々は長い間,日本の土地で日本人となる勉強のほかにしたことはない。しかし,我々は日本人ではない。我々は素晴らしい歴史と文化を持った朝鮮人である。一方,野蛮な日本軍国主義者たちが我々の歴史と文化を学べないように圧迫したため,我々は,それらを知らないでいる。みなさん,我々は素晴らしい朝鮮人となるために,なによりもまず,すべてのことを知り,学ばなければならない。

ここには,学ぶことの重要性がなんども強調されている。こうした内容を子ども向け雑誌,しかも朝鮮語によって記されたことで,どのくらいの人びとが理解可能であったのかは不明であるが,少なくとも発行者たちのほとぼしる情熱と息づかいには十分に感じ取れる。

③『우리 동무』(私たちの友だち)(朝鮮語)

1947年10月(推定),東京にあるウリトナム(우리 동무)社により創刊。同誌には上級用(4,5,6年)と下級用(1,2,3年)の二種類があったとされる。だが,プランゲ文庫には,どちらのヴァージョンかはわからないが,一種類が確認されるのみである。

1949年1月号の奥付からは,発行所は大阪・布施の朝鮮新民生社,発行人兼編集は劉載鉉となることがわかる。GHQ報告書に見られる雑誌『よい友だち』であると²¹考えられる。ウリトナム社と朝鮮

新民生社がどのような関係にあったかなど、不明な点が多い。

④ “Boy's Life”（朝鮮語）

1947年12月、東京にある朝鮮少年生活社にて創刊。発行主体は、国際少年団朝鮮総連盟日本中央総本部であり、2000部を印刷。ボーイスカウトの訓練や規律、組織に関する手引きとして発行。

（7）オピニオン誌

①『自由朝鮮』（日本語）

1946年4月、東京にある同友社にて創刊。300部。創刊の目的は、いかにして、朝鮮人の手で解放朝鮮、自由朝鮮、文化朝鮮を建設すべきか、その種をまく役割にあった²³。GHQの分析によれば、『自由朝鮮』は、朝鮮統一の問題を中心に構成された。朝鮮の迅速かつ完全な統一を主張し、南朝鮮だけでなく、ソ連の支援を受ける北朝鮮に対しても反対の立場をとる。さらに米国の民主主義とソ連の共産主義のいずれも拒否しながら、日本人、朝鮮人、中国人は、人びとの利益にたって考え、行動すべきと論じている。また、日本占領と日本政府の政策に批判的であり、阪神教育闘争は共産党に責任があるとして、批判している²⁴。『自由朝鮮』には、南北、あるいは米ソという単純な二項対立の枠組みでは捉えきれない多様な論の広がりが見られた。

②『魂』（日本語）

岩手県黒沢尻町にある皇学会により創刊。編集印刷発行人を鄭然圭とする。第15巻167号が、1946年4月に発行されていたことから、戦時中に創刊され、戦後に復刊された雑誌と推測されるが、詳細は不明である。尹健次によれば、「解放後」、在日朝鮮人は、天皇（制）について、内なる問題として捉える営為が不十分であったと指摘する²⁵。在日朝鮮人知識人のなかで、天皇（制）に関する議論は活発になされなかったと考えられている。こうした状況で、『魂』にて、天皇制が積極的に議論されていたことは、この雑誌の持つ特徴をきわめて明確に浮かび上がらせる。

③『民主朝鮮』（『文化朝鮮』）（日本語）

1946年4月、民主朝鮮社（朝鮮文化社）により、神奈川県横須賀で創刊。7000部。『民主朝鮮』は、戦時中に金達寿や李殷直、金聖珉、張斗植が集い、同人誌として発行していた『鷓林』を出発点とする。終戦後、彼らは「朝鮮の文化を日本人に紹介することで、朝鮮・朝鮮人に対する偏見にみちた認識を正そう」という問題意識から、雑誌『朝鮮人』の発行を計画した。だが、当時、朝連神奈川県委員長であった韓徳銖が「われわれは民主的祖国をつくるんだから、雑誌は『朝鮮人』より『民主朝鮮』としたほうがいい」と主張したことで、雑誌名は『民主朝鮮』に決定した。

日本人を対象読者として想定していたことは、「創刊の辞」でも明確に示されている。

ここに於いて我等は、我等の進むべき道を世界に表明すると同時に、過去三十六年といふ永い時間を以て歪められた朝鮮の歴史、文化、伝統等に対する日本人の認識を正し、これより展開されようとする政治、経済、社会の建設に対する我等の構想をこの小冊子によって、朝鮮人を理解せんとする江湖の諸賢にその資料として提供しようとするものである。

『烽火』（1949年6月号）に掲載された出版広告には、「朝鮮の現況を最も正確に報道する唯一の総合誌」とある。『民主朝鮮』は、日本人に朝鮮の現況を伝えることを目的としていた。

GHQの分析によれば、『民主朝鮮』の論調を、「アカ」がかっていると見ていた。同誌は、南北朝鮮、

そして左右を統一できる資質をもつ唯一の政治組織として、南朝鮮の民主主義民族戦線を支持していた。南朝鮮に北朝鮮のスタイルを導入すべきと主張した。また、GHQ 占領に対してはきわめて強い批判的態度を示した。『民主朝鮮』は、米国や他の連合国批判、そして左翼プロパガンダを激しく展開しており、在日朝鮮人雑誌のなかで、GHQ によって最も厳重に検閲され、たびたび発禁処分²⁶にされた「要注雑誌」の一つであった。

④『朝』（日本語）

1946年12月、「朝」出版株式会社により東京で創刊。出版社の所有者は高桂淳であり、3万部を発行²⁷。創刊は、「平和と自由を永遠に愛し、それを追求する人びとの生活に、少しでも「花」としての価値を持たすと共に、鮮・日両民族間の連絡船の役割を、いくらかでも、為しうればとの希ひ」²⁸からなされた。主な執筆陣は、日本人であった。

⑤『朝鮮新民報』（日本語）

1946年12月、新朝鮮出版社により東京で創刊。創刊号には、民団団長の朴烈や建青委員長²⁹の洪賢基、そして南朝鮮の新民党党首である白南雲からの祝辞が掲載されていた。同誌は明らかに南朝鮮を支持する政治的立場を持つものであった。だが、洪賢基が、「言論機構は社会の公器」であり、「機関誌的な役割をしてはならぬ」と主張したように、特定の政治路線に沿った機関誌ではないことを強調していた。

⑥『国際』（日本語）

東京で吉元成が経営する極東出版社により創刊。1947年6月号の「編集後記」によれば、『国際』は創刊後、二年が経ったという。これを踏まえれば、創刊は1945年7月となり、疑問が残る。「編集後記」について、「創刊二年目に入った」という意味で解釈するのが合理的であろう。そうであるならば、創刊は1946年6月頃であったと考えられる。さらに「編集後記」は、当初、『国際』は文学雑誌として創刊されたが、用紙不足により、総合雑誌『国際』へと改題したという。

以上より、『国際』は、1946年8月に極東出版社から発行されていた『国際文学』の後継誌であったと考えられる。

⑦『自由論戦』（日本語）

1946年6月、東京にある自由論戦社により創刊。発行兼編集人は李義榮とし、タブロイド判で発行。発行頻度こそ月刊ではあったが、新聞とほぼ同様の形態をとっていた。同誌は、平和と自由を獲得するための新しい思想を探求する場にならんとして創刊された³⁰。そこには、左右の思想的枠組みを超越した思索の重要性が示されていた。

⑧その他のオピニオン誌

プランゲ文庫に所蔵されていないオピニオン誌に、『建国』（建国社）や『前進』（発行者不明）があり、それらは『在日朝鮮人関係資料集成戦後編 第9巻』（不二出版、2001年）で確認できる。

(8) 学術誌

①『科学と技術』（日本語）

在日本朝鮮科学技術協会により東京で創刊。1948年4月に8・9・10号合併号として発行され、表紙には「建国第一号」の表記も見られるが、創刊年月は不明である。執筆者はほぼすべて朝鮮人であり、薬品工場などを経営する人物や東京工業大学の留学生など科学分野に専門的知識を持つ者であった。同

誌は、南朝鮮を政治的に支持しており、科学知識を読者に提供することで、南朝鮮の発展に寄与する目的をもって創刊された。

②『歴史』（日本語）

1947年12月、史学社により東京で創刊。5000部。「編集後記」（1947年12月号）は、編集方針について、こう記している。「僕らはかつて戦時中、この国の歴史界、といふより言論思想界を支配していた「皇国史観」の継承者でないことはいふまでもない。のみならず唯物史観の徒でもない。何ら政治的意図はもっていない。あくまで厳正公平の立場にたつて□く世界に歴史といふ眞実を求め、探求し、新しい社会の創造に一路邁進するものである。」『歴史』は、政治性を強く否定している。事実、GHQは、『歴史』が科学や哲学、文学、芸術の歴史に関する内容で構成されており、非常に重厚なアカデミックな色彩を有していると評していた。

こうした一見、「非政治的」に見える雑誌が持つ政治性に注目することは、占領期における在日朝鮮人雑誌を読み解いていくうえで、大きな手がかりになる。

③『世界人』（日本語）

1948年4月、京都にある世界人社にて創刊。6000部。GHQは、同志社大学の朝鮮人学生によって発行されているとし、ある朝鮮人僧侶が財政面で支援している。そして執筆は、著名な学者によってなされ、仏教と哲学の観点から主として世界文化の交流に力点をおいた編集になっていると分析した。「創刊の言葉」によれば、季刊誌『世界人』は、世界人的意識の昂揚と鼓吹をはかり、国際間の相互理解と親善を促進するために創刊されたとされる。『世界人』は、朝鮮人や日本人という「垣根」を超えた、文字通りコスモポリタンな方向性をもって創刊された雑誌であった。

(9) 娯楽誌

以下に示す雑誌について、GHQは朝鮮事情や政治に関連した内容が見られず、日本人所有の雑誌とほとんど違いのない純粋な商業雑誌として分析した。³⁴

①『探偵よみもの』（日本語）

東京にある国際文化社により発行。3万部。内容は探偵物に限られる。³⁵1945年9月22日に創刊された『週刊新日本』の改題。

②『新世界』（日本語）

大阪にある新世界新聞社により創刊。3万部。創刊は1946年中と推定されるが、詳細は不明。GHQの分析に依れば、同誌はもともとエロティックな内容を売りにしていたが、警察が猥褻出版物への取締りキャンペーンを実施したために、大衆フィクション雑誌に内容を変更した。なお、柳洙鉉を社長とする新世界新聞社は、社員280人を抱え、『新世界新聞』の日本語版と朝鮮語版をあわせて27万5千部を発行する大規模新聞社であった。³⁶

③『風車』（日本語）

1947年12月、東京の極東出版社により創刊。3000部。内容は、「冒険探偵小説・恋愛探偵小説・アメリカ生活」に関するもので構成。King Features Syndicateで出版された米国雑誌“Windmill”の日本語版。

おわりに

以上、見てきたように、GHQ 占領期に在日朝鮮人によって刊行された雑誌は、たんに政治的な論調を掲げたものだけではなく、文学などの芸術や科学や歴史といった学術的性格の雑誌、さらには娯楽誌なども発行されるなど、在日朝鮮人雑誌のもつ思想的広がりや浮き彫りにされた。こうした多様な雑誌の発行状況は、民族運動や政治闘争の側面のみで絡みとられがちで、占領期における在日朝鮮人の生活世界の奥深さを感じさせる。

プランゲ文庫に眠る在日朝鮮人雑誌は、こうした思想的広がりや生活世界の奥深さを私たちに教えてくれている。いったい在日朝鮮人は、占領下の日本社会で、何を考えながら、日々の生活を営んでいたのでしょうか。プランゲ文庫の資料を活用して、彼ら・彼女らの思いに耳をそばだて、紡ぎだしていくことが、今後の課題となる。

注

- 1 山本武利・早稲田大学教授を編集代表とする『占領期雑誌資料大系』（岩波書店）が、2008年9月より順次刊行されている。プランゲ文庫所収資料については、「占領期新聞・雑誌情報データベース」（早稲田大学20世紀メディア研究所）<http://m20thdb.jp/>で検索できる。
- 2 筆者は、こうした問題意識に基づいて、拙著（2007）『在日朝鮮人のメディア空間—GHQ 占領期における新聞発行とそのダイナミズム』（風響社）をまとめている。
- 3 呉圭祥（2009）『在日本朝鮮人連盟—1945-1949』岩波書店、246-247。
- 4 呉圭祥、前掲書、250。
- 5 小林知子は、漏れがあることを推測しながらも、占領期に在日朝鮮人が刊行した雑誌には15タイトル存在していることを指摘する。小林知子（1992）「GHQによる在日朝鮮人刊行雑誌の検閲」『朝鮮史研究会論文集』22号。
- 6 小林知子の前掲論文、高柳俊男（1986）「『民主朝鮮』から『新しい朝鮮』まで」『季刊三千里』48号、金達壽（1986）「雑誌『民主朝鮮』の頃」『季刊三千里』48号。
- 7 在日本大韓民国居留民団（1987）『民団40年史』、35。
- 8 前掲『民団40年史』、38。
- 9 「新朝鮮創刊辞」『新朝鮮』1946年7月号
- 10 呉圭祥、前掲書、248-249。
- 11 小林聡明（2008年9月）「在日朝鮮人メディア研究の意義と資料紹介 - 経済紙を中心に」『図書館便り』No.126、神奈川大学図書館
- 12 呉圭祥、前掲書、252。
- 13 許宗軫については、拙著。
- 14 呉圭祥、前掲書、253。
- 15 呉圭祥、前掲書、255。
- 16 “*Korean Magazine*”, Box8633, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 17 吉元成「巻頭言」『国際文学』1946年8月1日
- 18 「巻頭言」『白民』1948年2月号
- 19 呉圭祥、前掲書、256。

- 20 「我々の通信を持とう！」(朝鮮語)『어린이通信』1946年7月
- 21 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 22 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 23 『自由朝鮮』創刊号, 1946年4月
- 24 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 25 尹健次(1992)『「在日」を生きるとは』岩波書店
- 26 金達壽, 前掲論文
- 27 “*Korean Magazine*”, Box8633, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 28 「「朝」を贈る」『朝』1946年12月号
- 29 洪賢基「祝辞一言論機構の使命」『朝鮮新民報』1946年12月, 創刊号
- 30 「創刊の辞」『自由論戦』1946年6月号
- 31 「歴史」1947年12月, 創刊号
- 32 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 33 「創刊の言葉」『世界人』1948年4月
- 34 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 35 “*The Korean Press in Japan (CIS Special Report, Public Opinion Survey No.1)*”, Box8648, GHQ/SCAP Records, RG331, NARA.
- 36 拙著。